日本國天皇家論
4章　壬申の乱

日本國天皇家と九州天皇の内戦
続　壬申の乱

日本書紀天武上（壬申の乱）を書いた史官の筆は抑制されている。彼は天智と天武が会見した「大殿」がどこか誰にも分別できないように書いている。通常の解釈は滋賀県近江に残る「錦織遺跡」だと考えられている。「近江朝」と天智王朝のことであるから「大殿」が錦織遺跡と考えるのは妥当といえば妥当である。

しかし、壬申の乱の戦場は近畿天皇家の「近江」「河内」「美濃」「不破」「伊勢」ではない。戦場は九州天皇家の「近江」「河内」「美濃」「不破」「伊勢」だった。

では、日本國天智天皇と九州天皇家天武の会見が行われた「大殿」とはどこか。

天武は九州天皇家の「嶋の宮（彦島）」にいた。

壬申の蜂起を決意して天武は家族と住んでいた彦島の「嶋の宮」から東國へ脱出した。この東國とは九州天皇家の伊勢である。九州天皇家の伊勢とは行橋市である。行橋市は太宰府から見て東部である。従って、九州天皇家の伊勢（行橋市）、九州天皇家の美濃（苅田町）は「東國」と呼ばれていたのである。

九州天皇家の天皇、天武は彦島・小倉北区・小倉南区・苅田・行橋市・田川市をその領土としていた。天武が九州天皇家の伊勢を目指したのは当然であった。蜂起するにはそこが最も戦略的に優れた土地だったからである。

壬申の乱は北九州が舞台であった。だが、これだけでこの物語の全容が明らかになったわけではない。その始まりの舞台はまだ闇の中である。日本國朝廷の太政大臣、大友王はどこにいたのか。天武はどこにいたか。

日本國天皇天智の御所

日本書紀は天智天皇と天武の会見を次のように伝えている。

・天智10年（671）冬10月の庚辰（17日）に、天皇（天智）、臥病したまひて、痛みたまふこと甚し。是に、蘇賀臣安麻侶を遣して、東宮を召して、大殿に引き入れる。時に安摩侶は、素より東宮の好したまふ所なり。密かに東宮を顧みたてまつりて曰さく、「有意ひて言へ」とまうす。東宮、茲に、隠せる謀有らむことを疑へて慎みたまふ。天皇、東宮に勅して鴻業を授く。乃ち辞譲びて曰はく、「臣が不幸き、元より多の病有り。何ぞ能く社稷を保たむ。願はくは、陛下、天下を挙げて皇后に附せたまへ。仍、大友皇子を立てて、儲君としたまへ。臣は、今日出家して陛下の為に功徳を修はむ」とまうしたまふ。天皇、聴したまふ。即日に出家して法服をきたまふ。因りて以て、私の兵器を収りて、悉に司に納めたまふ。

・壬午（19日）に吉野宮に入りたまふ。時に左大臣蘇賀赤兄臣・右大臣中臣金連、及大納言蘇賀果安臣等送りたてまつる。菟道より返る。或の曰はく、「虎に翼を着けて放てり」といふ。是の夕に、嶋宮に御します。

・癸未（20日）に、吉野に至りて居します。是の時に、諸の舎人を聚へて、謂りて曰はく、「我今入道修行せむと

す。故、随ひて修道せむと欲ふ者は留れ。若し仕へて名を成さむと欲ふ者は還りて司に仕へよ」とのたまふ。然るに退く者無し。更に舎人を聚へて、詔すること前の如し。是を以て、舎人等、半ば留り半ば退りぬ。

・天智10年(671)12月癸亥朔乙丑(3日)に、天皇近江宮に、崩りましぬ。

・天武元年(672)春3月の壬辰朔己酉(18日)に、内小七位阿曇連稲敷を筑紫に遣はして、天皇の喪を郭務悰等に告げしむ。是に、郭務悰等、咸に喪服を着て三遍挙哀る。東に向いて稽首む。

・壬子(21日)に、郭務悰等、再拝みて、書函と信物とを進る。

壬申の乱の蓋を開ける天智・天武の会見が行われたのは真冬の10月17日、場所は「大殿」である。この「大殿」とはどこに存在した宮殿なのか。天智天皇が亡くなったのはこの会見から、47日後の12月3日である。

・天智10年(671)12月癸亥朔乙丑(3日)に、天皇、近江宮に、崩りましぬ。

天智天皇が亡くなった場所は「近江宮」と明記されている。この「近江宮」は滋賀県大津市に存在した宮で、錦織遺跡である。筑紫にいた郭務悰等は天智天皇崩御の訃報を聞いて、全員喪服を着て、三度、哀情の意を表し東に向いて拝んでいる。郭務悰が見ていた方向は東の琵琶湖近江である。

では10月17日に病床の天智と天武の会見が行われた「大殿」とは琵琶湖の近江宮の大殿だったのか。会見後の天武の足どりを見よう。

(1) 10月17日、天智と天武が「大殿」で会見
(2) 10月19日、吉野宮・・・・・・吉野宮は小倉南区竹馬川の河口に存在した九州天皇家の王宮である。
(3) 10月19日の夕、嶋宮・・・・嶋宮は天武の家族が住んでいた彦島の本村町に存在した王宮である。
(4) 10月20日、吉野・・・・・・・この吉野は天武が登った「吉野の山」を指す。「吉野の山」とは北九州市企救半島の妙見山である。

天武が会見の時、「出家して修行したい」と云ったのはその場のとっさの機転だったと思われる。蘇賀臣安麻侶が身の危険を直前に忠告してくれたおかげである。だが、天武の出家は誰にとっても思いがけない出来事だった。その場に居た者はあっけにとられたであろう。況や天武側の家臣は何も知らない。

故に、天武は急いで九州天皇家の王宮・吉野宮へ行き、皇子と臣下に事情を説明し、以後の指示を与えたと思われる。そして次に家族が住んでいた彦島の「嶋宮」に戻り、今後の相談をして、翌朝、彦島から南に見える「吉野の山」に登ったのである。吉野とは九州天皇家の「吉野」である。九州天皇家の「吉野」とは小倉南区の竹馬川の河口である。天武が修行の為に登った吉野の山とは「妙見山」である。「妙見山」は古来、修験の山として有名である。

天武には心配事は山ほどあった。

み吉野の 耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は降りける その雪の 時なきが如 その雨の 間なきが如 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を　　(万葉　天武天皇の御製歌25番)

み吉野の耳我に嶺に、止むときがないように雪がふる。降らない間がないように雨が降る。その雪が止む時がないように、その雨が止む間がないように、山道の曲がり角も思考が中断することなく、これからの行く末を案じて、耳我の山道を登ったことである。

天武は10月19日には九州天皇家の「吉野宮(小倉南区)」にいた。そしてその夕には九州天皇家の「嶋の宮(彦島)老町)」北九州に居た。天智と天武が会見した「大殿」とは、二日間で小倉南区の吉野宮に到着できる距離に存在した「大殿」である。10月17日の会見場所の「大殿」は滋賀県「近江宮」とはならないのである。

天武と唐の五月同盟

・天武元年（672）春3月の壬辰朔己酉（18日）に、内小七位阿曇連稲敷を筑紫に遣はして、天皇の喪を郭務悰等に告げしむ。是に、郭務悰等、咸に喪服を着て三遍挙哀る。東に向いて稽首む。
・壬子（21日）に、郭務悰等、再拝みて、書函と信物とを進る。

日本國天皇天智が琵琶湖「近江宮」で崩じたことを筑紫に居た郭務悰に知らせたのは誰であろうか。天武である。「筑紫」とは博多である。唐の使節団は博多に駐屯していた。

この記事は既に天武紀の記事である。唐の郭務悰に日本國天皇の崩御を連絡したのは天武だった。そして21日に郭務悰等が「書函と信物」を届けた相手は日本國ではなく天武である。この書函の宛名には何と書かれていたか。「大唐皇帝敬問倭王書」であったと云う。（日本書紀天武天皇上元年頭注）

倭王とは天武である。天武は神武が開いた倭（やまと）の王であった。故に「倭王」であった。この時代、天皇と呼ばれていた王は日本國の王である。12月3日に亡くなった「天智」が日本國の天皇だった。日本國天皇天智のみが「天皇」と呼ばれていたのである。神武に始まる九州天皇家の王は「倭王」という称号であった。天武もこの時は北九州の「倭國の王」でしかなかった。故に「倭王」だった。唐側の認識は正確である。

日本國の国王「天皇天智」が亡くなった。天武からその報せを聞いた大使郭務悰の対応は早かった。日本國に見切りをつけ「倭の王」・天武と同盟を結ぶべく方針を転換したのである。それが21日、郭務悰等が再拝みて天武に渡した書函であった。唐の方針転換を察した天武は多大な贈り物を郭務悰に与えている。

・天武元年（672）夏5月辛卯朔壬寅（12日）に、甲冑弓矢を以て、郭務悰等に賜ふ。是の日に、郭務悰等に賜ふ物は、総合て、絁一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。

この時、5月12日に天武と唐の同盟が成立したと見ることができる。天武－唐同盟が結ばれた時、郭務悰は筑紫に駐屯し、天武も妙見山から下りて嶋宮に居たのである。この五月同盟が結ばれてしばらくして、天武は「近江朝」の不穏な動きを聞く。そこで天武は直ちに蜂起を決意して東國（行橋市）に向かうのである。

朕、位を譲り、世を遁るる所以は、独り病を治め身を全くして、永に百年を終へむとなり。然るに今、已むこと獲ずして、禍を承けむ。何ぞ默して身を亡さむや。　（日本書紀天武紀上）

近江朝太政大臣大友王が居た「京」は太宰府

こうして天武は東國へ出発する。東國とは現在の美濃地方ではない。この東國とは九州天皇家の東國である。苅田町・行橋市が東國である。太宰府から見て行橋市はまさしく「東の國」である。天武の東國への出國を聞いた「近江朝」の反応を記した記事がある。

・是の時に、近江朝、大皇弟東國に入りたまふことを聞きて、其の群臣悉に愕じて、京の内震動く。或いは遁れて東國に入らむとす。或いは退きて山澤に匿れむとす。爰に大友皇子、群臣に謂りて曰はく、「何にか計らむ」とのたまふ。一の臣進みて曰さく、「遲く謀らば後れなむ。如かじ、急に驍騎を聚へて、跡に乗りて逐はむには」とまうす。皇子従ひたまはず。韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大摩侶を以て、東国に遣はす。穂積臣百足・弟五百枝・物部首日向を以て倭の京に遣はす。且、佐伯連男を筑紫に遣はす。樟使主盤磐手を吉備国に遣はして、並に悉に兵を興さしむ。

天武が東國へ出発した報せはすぐ近江朝太政大臣大友王のもとに届いた。その報せを聞いて群臣は全て恐れおののき、「京の内」が動揺したと記している。ここに「京」が登場する。京に居た大友王は群臣を集め相談すると、一人の臣が策を献上する。

いろいろ相談していると、後れをとってしまう。ここは騎馬を集めて、すぐ後を追いかけましょう。

この提案は大友王が居る京と天武が出国した東國とはそんなに離れていないことを示している。京から騎馬で追いかければ天武に追いつける距離にあったからこのような作戦を進言したのである。
その頃、子連れ、女連れの天武は東國（行橋市）に向かって徹夜で行進していた。では小倉南区を行橋市に向かって必死に進む天武一行を騎馬だったら追いつける距離にある「京」とはどこか。太宰府である。太宰府－小倉南区下曽根は72.9kmである。徒歩では14時間35分かかる。

ひとりの臣下が提案した騎馬で追えばどうか。これがなかなか難しい。天武の時代の馬と明治陸軍の馬とは単純に比較はできない。行軍する道の状態にも依る。また騎乗する兵の武具の重さも速度に影響を与えるという。単純に比較することはできないのである。

騎馬武者だけの部隊の行軍速度については分かりません。
明治以降の馬とは馬格がことなるのが第一の理由である。また、当時の馬は去勢しておらず、口取がついて行軍していただろうから実際のところは不明である。参考までに旧軍の騎兵隊の普通行軍速度は1時間7.5kmと規定されていた。勿論、明治陸軍騎兵隊の軍馬は去勢されていたから特に口取は必要ない。
因みに、天正十一年の賤ケ岳合戦時の大返しでは、夜も徹して岐阜の大垣から近江木之本までの52kmを5時間で軍勢を移動させたといわれており、14時に大垣を出て19時に木之本に秀吉と騎馬の武士が参陣している。休息なしで52kmを5時間、時速10.5km弱の騎馬行軍ということになるが、秀吉は二回乗換えているから、三頭を使用しているのだが、最初の一頭には18kmを走らせ、乗り潰した一頭は22kmも走らせている。そこで鎧を着用した騎兵の急行軍は時速9kmと仮定しておく。
（ http://kagiya.rakurakuhp.net/i_158570.htm）

kagiya氏の研究では、騎馬は一時間9kmと想定されている。氏の想定に基づいてこの速度で72.9kmを追いかけると、約8時間である。この所要時間であれば、太宰府から小倉南区への騎馬による追討作戦は現実的で勝算はあったと思える。

この時、日本國天皇家の太政大臣大友王と重臣たちは太宰府にいたのである。壬申の乱は太宰府に居た日本國天皇家と九州天皇家・天武との戦いであった。

天武は彦島の九州天皇家伝統の宮「嶋宮」に居た。天武が彦島から小倉南区を経て東國（行橋市）に向かったと聞いた近江朝の群臣たちは乱れた。或る者は天武が向かった東國(行橋市)へ向かおうとした。その理由は天武に降るためではない。当時、太宰府から関西への主たる交通手段は行橋市から出る船便だったからである。彼らは九州を脱出しようとした。また或る者は「山澤」に隠れようとした。「山澤」とは太宰府の北にそびえる大野山をいうのであろう。この山には唐との決戦を想定して改築された山城があった。そこへ逃げ込んで戦おうとしたのである。

騎馬追討作戦を採用しなかった太政大臣大友王が打った手は手持ちの兵による決戦ではなく、援軍要請であった。四方へ使者を送った。

東國・・・・・韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大摩侶
倭の京・・・穂積臣百足・弟五百枝・物部首日向
筑紫・・・・・佐伯連男
吉備國・・・樟使主盤磐手

東國とは行橋市である。行橋市は広い。故に三名の使者を送った。筑紫とは博多である。吉備國とは九州天皇家の吉備國、彦島である。この中で不明なのは三人の使者を送った「倭の京」である。
「倭の京」とはどこか。「倭」とは九州天皇家の都の名前である。神武が開き九州天皇家が統治してきた都が「倭（やまと）」である。「倭」とは九州天皇家の「倭（やまと）」で、「倭の京」とは香春町・田川市である。

日本書紀編者が「倭の京」と「倭」をつけて特定したのは、ただ「京」と書かれた太宰府と区別するためである。九州天皇家の「京（倭の京）」と日本國天皇家の「京（太宰府）」の二つの京が存在していたと記しているのである。「倭京」とは香春町・田川市をさし、ただ「京」と書かれた場合は太宰府をさす。
「倭京」は壬申の乱の戦記（日本書紀二八巻）では「古京」とも書かれている。「古京」は天武が現在居る太宰府を新しい京であると認識した上での「古い京」という意味である。「古い京」とは香春町・田川市、「新しい京」とは太宰府である。
「倭の京」とは神武建国の倭（やまと）の京である香春町・田川市をさす。壬申の乱において「倭京」、香春町・田川市は戦略的に重要な位置にあった。従って日本國天皇家大友王は「倭京」に使者を送ったのである。

日本國天智天皇が居た「大殿」は太宰府大極殿

ここでもう一度天智・天武の会見場所であった「大殿」に戻ることにしよう。会見は10月17日であった。

10月17日、大殿で天智と会見
10月19日、吉野宮
10月19日の夕、嶋宮
10月20日、吉野山

会見において天武は天皇の病気回復祈願のためすぐさま出家したいと述べる。そして法衣を着て吉野に向かった。10月19日に吉野の宮に到着している。この吉野の宮は小倉南区に存在した九州天皇家の大宮である。太宰府から二日間あれば小倉南区の吉野宮には十分行き着ける。天武が吉野宮に立ち寄ったのは宿泊が目的ではない。宿泊したのは「嶋宮」である。吉野宮には天武の二人の皇子が居た。高市皇子と大津皇子である。出家する自分に替わって政務を二人の皇子に委ねなければならない。故に立ち寄ったのである。

そして自分の住居である「嶋宮」に帰った。ここには妻（持統）と幼い草壁皇子・忍壁皇子がいた。そして翌日、九州天皇家で古来修行の山として有名だった企救半島の耳我の嶺（妙見山）に登ったのである。
日本書紀編者が記述していることは正確で、時間、地理に於いて矛盾も問題点もない。ただ「大殿」を太宰

府大極殿の大殿と書けなかっただけである。

日本國の防衛網整備

天武が日本國天皇天智と会見した「大殿」とは太宰府の大極殿である。日本國天皇天智は唐の使者との外交の為九州の京、太宰府に来ていた。日本國天皇家は白村で負けはしたものの唐と戦う意志は強かった。日本國天皇家は決戦の為に防衛を着々と固めている。

・天智3年（664）是歳、対馬嶋・壱岐嶋・筑紫國等に防と烽とを置く。又筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名けて水城と曰ふ。
・天智4年（665））秋八月に達率答[火本]春初を遣して、城を長門國に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して大野及椽、二城を築かしむ。
・天智6年（667））11月、是の月に、倭國の高安城・讃吉国の山田郡の屋嶋城・対馬国の金田城を築く。

天智3年（664）に筑紫に大堤を築いて水を蓄えたという記事は「水城」のことである。だがこの水城をこの時始めて築いたのかと云えばそうではない。太宰府観音寺に保管されていた水城の木樋を年代測定したところ、この水樋は「西暦430年＋－30年」のものであるといわれている。（「太宰府は日本の首都だった」内倉武久著）

この時代の九州の王者は姫氏である。太宰府は姫氏が造営した京であった。水城の木樋がその当時のものであれば最初に水城を造ったのも姫氏である。太宰府はその南を水城で防衛、北は大野山の山城で防衛されていた京だった。唐の京、長安城のように強固な城壁で防衛されていた京ではないが南を流れる川と背面の山を利用して防衛されていた。

大野城の城門の柱に使われた丸太の年代測定結果もある。それによれば648年(最外年輪）である。この結果は天智4年(665) に始めて大野城が築城されたのではないことを示している。天智4年以前に大野城は既に築城されていたのである。築城したのは同じ姫氏である。彼らは太宰府を造営すると同時にその防衛システムも構築した。それが水城と山城であった。

天智6年に記されている対馬国の金田城でも古い土塁が発見された。その土塁にあった炭化物二点の年代測定の結果は次のようであった。

(1) 540年～630年（450年＋－50年
(2) 590年～650年（500年＋－50年）　（「太宰府は日本の首都だった」内倉武久著）

この数値も日本書紀の天智6年（667）の記述と合致しない。しかしだからと云って日本書紀天智6年の記述がでたらめだという結論に結びつくものではない。対馬国の金田城を最初に築いたのはむろん天智ではなく、対馬の古代国家の王だった。対馬は朝鮮半島と日本を往来する海上交通の要所である。この島に存在した古代国家が天智6年（667）まで城も築かずにきたとはありえないことである。金田城は天智以前に存在していたのである。ただ日本國天皇天智は667年に古来から存在した金田城を修理し唐との戦いに備えたのである。

671年、国土防衛準備を着々と進めてきた日本國天皇天智は病床にあった。大友王は太政大臣とはいえまだ若い。白村で敗退した日本國の天皇として責務を遂行するだけの力量はまだない。だがそのことだけが天智の不安材料だったのではない。北九州には九州天皇家が存在する。その王は天武である。果たして天武は日本國朝廷に味方するか、それとも敵対するか。日本國天皇はそれを確かめたかった。故に太宰府大殿に呼び出したのである。

天武の返答は如何に。日本國重臣が注視するなか天武は答える。私は天皇の為に出家して山に籠もる。恐らくその場に居合わせた人々にとって意外な返答だったであろう。ならば許そう。日本國天皇は安堵して太宰府を去り、琵琶湖の近江の宮に帰って行った。そして、帰国後間もなく近江宮で崩くなった。

日本書紀編者は日本國天皇崩御の様子及び宮廷の葬儀の様子を一切記していない。このような不思議なことがあるだろうか。ただ吉野の天武と日本國の対立を暗示したつまらない童謡を載せているだけである。

百済救援の為に白村に出兵し壊滅した日本國の存亡の危機を一身に引き受けた日本國天皇天智。太宰府まで出向き、唐との外交に当った天智が近江宮で亡くなった。日本國の人々は哀んだことであろう。法興寺を始め日本國中の寺が経を読みその死を弔ったことであろう。日本書紀編者は日本國天皇天智の陵の名前も場所も記していない。

天武が蜂起を決意するのはその死後、わずか5ヶ月後のことである。日本國天皇天智の埋葬すらまだ終わっていなかった。なぜ、天武は蜂起を急いだのか。日本國天皇家の大友王と重臣がまだ太宰府に居たからである。大友王はこの時、太政大臣であった。大友王が日本國天皇家の琵琶湖近江に帰って天皇位に就いてからではもはや遅すぎる。それからの蜂起では勝算は全くない。決行するのは今、この時しかない。

日本書紀編者は壬申の乱に至るまでの日本國天皇家天智の御所を明確に記述することが出来なかったが、私たちは明確にすることが出来る。日本國天皇が居た御所は琵琶湖近江ではない。太宰府大極殿である。太宰府大極殿において日本國天皇家の天智は九州天皇家天武と会見していたのである。

壬申の乱は太宰府の近江朝と九州天皇家天武との戦い

日本書紀編者が省略した壬申の乱の始まりの舞台を現代の地名を使って書いてみよう。

・天智10年(671)10月17日に、太宰府に居た日本國天皇天智は蘇賀臣安麻侶を彦島の嶋の宮へ遣して、東宮(天武)を召して太宰府の大極殿に引き入れる。(太宰府－彦島本町　89km)
・10月17日に、天武、太宰府大極殿で出家して法服をきたまふ。
・10月19日に、天武、小倉南区吉田の吉野の宮に入りたまふ。(太宰府－小倉南区吉田　68km)
・10月19日の夕に、天武、彦島の嶋の宮に御します。(吉野宮－彦島本町　15km)
・10月20日に、天武、小倉南区の吉野の山(妙見山)に至りて居します。(彦島－吉野山　10km)
・12月3日に、日本國天智天皇、滋賀県大津市の近江宮に崩りましぬ。
・天武元年(672)3月18日に、天武、内小七位阿曇連稲敷を筑紫(博多)に遣はして、日本國天智天皇の喪を郭務悰等に告げしむ。是に、郭務悰等、咸に喪服を着て三遍挙哀る。東に向いて稽首む。
・3月21日に、郭務悰等、再拝みて、天武に書函と信物とを進る。
・5月12日に、天武、甲冑弓矢を以て、郭務悰等に賜ふ。是の日に、郭務悰等に賜ふ物は、総合て、絁一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。
・6月24日に、天武、彦島の「嶋の宮」を途發ちて東國(行橋市)に向かう。
(彦島本村町－彦島弟子待町　3.7km　門司区大里－小倉南区下曽根 14km　)
・6月に、太宰府に居る近江朝の人々、大皇弟東國(小倉南区長野)に入りたまふことを聞きて、其の群臣悉に愕じて、京(太宰府)の内震動く。或いは遁れて東國(行橋市)に入らむとす。或いは退きて山澤(大野山)に匿れむとす。爰に太宰府大極殿において日本國大友王、群臣に謂りて曰はく、「何にか計らむ」とのたまふ。一の臣進みて曰さく、「遅く謀らば後れなむ。如かじ、急に驍騎を聚へて、行橋市を目指す天武を跡に乗りて逐はむには」とまうす。大友王従ひたまはず。
韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大摩侶を以て、東國(行橋市)に遣はす。
穂積臣百足・弟五百枝・物部首日向を以て倭の京(田川市)に遣はす。
且、佐伯連男を筑紫(博多)に遣はす。
樟使主盤磐手を吉備國(彦島西山町)に遣はして、並に悉に兵を興さしむ。

日本國天皇家天智は天武に危惧を抱いていた。果たして大友王は天武の反乱を想定してたかどうか。この反乱は想定はしていたかもしれない。しかし、想定外の事が生じていた。それは唐と天武の同盟である。天武は日本國天皇天智が亡くなったことを近江朝より早く唐側に伝えた。すぐさま、唐は反応し、天武に親書を手渡している。この親書は唐－天武同盟結成の提案であったと思われる。5月12日に天武は甲冑弓矢を郭務悰等に与えている。この贈り物の意味は挙兵の意思表示であろう。5月同盟を経て天武は動いた。日本書紀はその決断の日、6月24日の行動を簡単に記している。

是の日に、発途ちて東國に入りたまふ。事急にして、駕を待たずして行す。黥に県犬養連大伴の鞍馬に

遇ひ、因りて御駕す。乃ち皇后は、輿に載せて従せしむ。津振川に逮りて、車駕始めて至れり。便ち乗す。是の時に、元より従へる者、草壁皇子・忍壁皇子、及舎人朴井連雄君・県犬養連大伴・佐伯連大目・大伴連友国・稚桜部臣五百瀬・書首根摩呂・書直智徳・山背直小林・山背部小田・安斗連智徳・調首淡海の類、二十有余人、女孺十有余人なり。即日に菟田の吾城に到る。大伴連馬来田・黄書造大伴、吉野宮より追ひて至けり。

この日、天武はどこから出発したのか。日本書紀編者は明確にしていないが、推測は可能である。むろん天武は吉野の山(耳我の嶺)から出発したのではない。10月20日に入山したが、天智は12月3日に亡くなった。吉野の山に籠もる理由はなくなった。天武はすぐ下山したであろう。

この日天武と行動を共にしたのは皇后(持統)と草壁・忍壁の皇子と舎人及び女、子どもだったと記録されている。これらの人々は天武の家族と宮の役人と家事のための使用人である。つまり天武は共に暮らしていた宮の人々全てを引き連れて出発したのである。天武が住んでいた宮とは「嶋宮」である。「吉野宮」ではない。彦島に存在した「嶋の宮」である。小倉南区吉田に存在した「吉野の宮」には大伴連馬来田・黄書造大伴が居た。彼らは、天武が「嶋の宮」から関門海峡を渡り、小倉南区を経て東國(行橋市)に向かったと聞いて、「吉野の宮」を出て天武を追いかけて来たのである。その日に「菟田の吾城」まで進んでいる。「菟田」は小倉南区長野に存在した地名である。

6月24日の天武の行動は急遽行われたとはいえ、唐との同盟を背景とした予定の行動であった。日本國天皇家大友王はこの同盟を知らなかった。天武は単独で行動したと読み誤ったのである。単独であれば恐れることはない。行橋市・筑紫・田川・彦島に援軍を要請すれば容易に近江朝の下に結集してくるだろうと読んだのである。しかしこれら諸国の長官は天武の動きを見ていただけでなく駐留していた唐軍の動向に注目していた。
もし大友王陣営が唐－天武同盟を察知できていたなら、日本國天皇家の朝廷は北九州で戦う作戦はとらなかったであろう。すぐさま太宰府から撤退して、母国日本國へ戻ったであろう。日本國天皇家の「近江」に戻り、大友王が天皇即位を宣言し、大友王朝を堅く固めれていれば天武は何もできなかったにちがいない。天武が九州で兵を挙げたとしても全国を支配下においていた日本國とでは戦いにならなかったであろう。

大伴連馬来田・弟吹負戦記

壬申の乱で重要な働きをしたのは大伴氏である。日本書紀天武上の壬申の乱の戦記は大伴氏の家記をもとにして書かれていると云われる。事実、日本書紀天武上には「是の日」として大伴氏の戦記が挿入されている。その主たる戦場は「倭(やまと)」である。

・672年6月是の時に當りて、大伴連馬来田・弟吹負、並に時の否を見て、病を称して、倭の家に退りぬ。然して其の登嗣位さむは、必ず吉野に居します大皇弟ならむといふことを知れり。是を以て、馬来田、先づ天皇に従ふ。唯し吹負のみ留りて謂はく、名を一時に立てて、艱難を寧めむと欲ふ。即ち一二の族及び諸の豪傑を招きて、僅に数十人を得つ。　　(天武紀上)

大伴兄弟が居たのは太宰府

大伴氏が登場する場面である。大伴兄弟が病と称して「倭(やまと)」の家に帰ったという記事である。だがこの記事はわかりにくい。なぜなら一体大伴氏はどこにいたのか不明だからである。どこから「倭(やまと)」の家に帰ったのかこの記事には書かれていない。むろん大伴氏はこの時まで近江朝の家臣だった。近江朝の家臣だったが、戦況は近江朝によくない。そう判断していわば近江朝を裏切り、天武につくために「倭(やまと)」の家に帰ったというのである。

記紀では「倭(やまと)」とは神武建国の倭(やまと)をさす。「倭(やまと)」とは香春・田川である。大伴兄弟の家は田川にあった。では彼らが仕えていた近江朝政権はこの時どこに存在したのか。日本書紀はこの要点を明確に書くことができなかった。天武紀の史官はここでも筆を抑制している。彼が明確に出来なかった大伴兄弟が居た場所は太宰府である。大伴兄弟は太宰府に存在した近江朝の臣下の一人として日本國朝廷に仕えてい

たのである。

その日本國天皇天智が日本國の近江宮（琵琶湖）で亡くなった。太宰府に残っていた大友王はまだ天皇ではない。日本國天皇家の大友王に叛旗を翻した天武は神武以来北九州を統治してきた九州天皇家の王である。さてこの戦いはどうなるか。大伴兄弟は北九州での戦いではこの土地の豪族は天武につくと判断したのである。よって病気と偽って太宰府から倭（田川）の家にもどり、天武に味方する人生を選んだのである。
吹負の心は「名を一時に立てて、艱難を寧めむと欲ふ。」という決意に現れている。

その最初の行動が倭（田川）に存在した飛鳥寺の北の日本國天皇家の陣営を襲うことであった。飛鳥寺といえば、私たちは奈良明日香の安居院を連想する。だがこの時代、奈良安居院が建っている場所に存在した寺は法興寺である。今でこそ奈良の安居院が飛鳥寺と呼ばれているが、元々そこに建立された寺は法興寺と呼ばれ、飛鳥寺と呼ばれていたのではない。日本書紀では奈良飛鳥に建立された寺は法興寺、或いは元興寺と書かれている。天武紀で「飛鳥寺」と書かれている寺は奈良の寺ではなく、田川市に存在した寺のことである。
弟吹負が襲撃した「飛鳥寺」とは田川市に存在した寺であった。

・是の日（6月29日）に、大伴連吹負、密に留守司坂上直熊毛と議りて一二の漢直等に謂りて曰はく、「我詐りて高市皇子と称りて、数十騎を率て、飛鳥寺の北の路より、出でて営に臨まむ。乃ち汝内応せよ」といふ。既にして兵を百済の家に繕ひて、南の門より出づ。先づ秦造熊に、犢鼻して、馬に乗せて、馳せて、寺の西の営の中に唱へしめて曰はく、「高市皇子、不破より至ります。軍衆多に従へり」といふ。爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穂積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に拠りて営を為る。唯し百足のみは小墾田の兵庫に居りて、兵を近江に運ぶ。時に営の中の軍衆、熊が叫ふ声を聞きて、悉に散け走げぬ。仍りて大伴連吹負、数十騎を率て劇に来る。則ち熊毛及び諸の直等、共与に連和し。軍士亦従ひぬ。乃ち高市皇子之命を挙げて、穂積臣百足を小墾田の兵庫に喚す。爰に百足、馬に乗りて緩く来る飛鳥寺の西の槻の下に。逮るに、人有りて曰はく、「馬より下りね」といふ。時に百足、馬より下ること遅し。便ちに其の襟を取りて引き墮して、射て一箭を中つ。因りて刀を抜きて斬りて殺しつ。　（天武紀上）

6月29日といえば天武はすでに九州天皇家の「伊勢の桑名郡」から「不破郡」にバックして、不破宮に入っていた。その時、すでに苅田町、行橋市、小倉南区の豪族は天武側についていた。戦いの火蓋がきって落とされようとしていた。丁度その頃、大宰府から倭（田川）に戻った大伴連吹負は倭（田川）の近江朝軍を襲撃する作戦を練っていた。

秦造熊という人物に覆面をさせ、「高市皇子が不破より来られたぞ。軍勢が多数来たぞ」と叫ばせる。是を聞いた田川・飛鳥寺の西に営していた近江朝の兵は逃げてしまい、大伴連吹負はまんまと営を占領してしまう。壬申の乱の主戦場は近江朝軍と天武軍が会戦した九州天皇家の近江（小倉南区）である。天武は不破の郡（苅田町）に本陣を構えていたのだから、近江（小倉南区）が戦場となったのは当然である。しかし、地図を見れば倭京（田川市）が戦略上、重要な位置を占めていたことが分かる。

古代北九州において交通の中心であった幹線道路の一つは行橋市を起点としている。行橋市から苅田町を経て小倉南区、小倉北区へ延びる。行橋市から香春、田川を経て太宰府へ延びる。これが謂わば国道一号線、本来の東海道である。後年近畿天皇家の役人たちも行橋市の草野津で上陸して太宰府に向かった。

> 蓑島漁港の横を奥に進み、右折してカキ直売場の前を通り、その先を左折して細い道を行くと、長峡川と今川の河口部に出ます。周防灘からの漁船は、左手の蓑島漁港への水路が隔壁で確保されていて、その上に誘導灯が立っています。その向こうは長峡川河口で、対岸は苅田町の日産自動車九州工場になります。
> 長峡川を上って行きますと、行橋駅の北北東に草野があります。古代には、この辺りまで海岸で、草野津（くさのつ、かやのつ）と呼ばれた港でした。官人達はここから上陸して、大宰府に向かいました。その草野津の入口に簑島は位置し、古代より知られた島でした。
> http://homepage2.nifty.com/kitaqare/kinn10.htm

天武は不破（苅田）に居る。背後は九州天皇家の伊勢、行橋市である。もし近江朝が倭京（田川）を支配下におけばいつでも行橋市に向かい、天武の背後をつくことができる。そうなれば、天武は前線の小倉南区に全軍を注ぐわけにはいかない。背後の防衛にも兵を割かねばならない。

また近江朝軍が撤退するとなればそれは太宰府である。太宰府に侵攻するには田川からのルートとなる。この場合においても、田川市は重要な位置にある。倭京（田川）を押さえることは、どちらにとっても重要な意味を持っていた。従って、近江朝は倭京（田川）に営を構え、武器庫を管理していたのである。もし、通説のように近江朝が琵琶湖大津、天武が岐阜県不破に陣を構えていたとすれば、奈良明日香は戦略的に重要な位置ではない。不破関ヶ原から奈良明日香までの道のりは162km、徒歩で32時間の距離である。奈良明日香を占領したからといって、岐阜県不破の戦いに影響を与えるものではなかったであろう。

大伴吹負は元々は近江朝の軍人であった。従って倭（田川）の重要性をよく認識していた。

> 今、天武は不破宮（苅田町）いる。近江朝は天武を攻めるにどのような作戦をたてるであろうか。恐らく近江朝は天武を南北から挟撃する作戦を立てるであろう。一隊は直方から小倉南区へ進み古代近江（小倉南区）で相対峙する。もう一隊は田川から行橋市に出て天武の背後から迫るであろう。近江（小倉南区）での戦闘が有利になるか不利になるかは倭京（田川）をどちらが押さえるかにかかっている。今は近江朝が押さえている。これはまずい。倭京を我々の手で押さえよう。

彼は倭（田川）を占領したことを天武に報告する。天武もその重要性をよく認識していたのであろう。地図の如く、天武不破陣（苅田町）と近江大友陣（太宰府）を結ぶ中間点に倭京（田川）は存在する。太宰府を出発した近江大友軍は上図のような進路をとって苅田町の天武陣へ攻撃したと思われる。ところが倭京（田川）は大伴吹負の計略によって奪われていた。この為近江朝軍の作戦は崩壊する。

・乃ち穂積臣五百枝・物部首日向を禁ふ。俄ありて赦して軍中に置く。且、高坂王・稚狭王を喚して、軍に従はしむ。既にして大伴連安麻呂・坂上直老・佐味君宿那麻呂等を不破宮に遣して、事の状を奏さしむ。天皇、大きに喜びたまふ。因りて吹負に令して将軍に拝す。
是の時に、三輪君高市麻呂・鴨茂君蝦夷等、及び群の豪傑しき者、響の如く悉に将軍の麾下に会ひぬ。乃ち近江を襲はむことを規る。衆の中の英俊を撰びて、別将及び軍監とす。庚寅に初づ乃楽に向ふ。

大伴連吹負は倭京（田川市）での勝利を不破宮（苅田町）にいた天武に報告する。田川市－苅田町は24．4km、徒歩で4時間53分である。天武は喜び吹負を倭京の将軍に任命する。そして倭京の「三輪君高市麻呂」「鴨茂君蝦夷」をはじめとして多くの「豪傑しき者」が吹負の元に参集することとなった。将兵を得た吹負はさらに武勲をたてるべく、近江朝を攻撃するために優秀な兵を選び、乃楽に向う。

古京とは田川市

・壬辰（7月3日）に、将軍吹負、乃楽山の上に屯む。時に荒田尾直赤麻呂、将軍に啓して曰はく、「古京は是れ本の営の処なり。固く守るべし」とまうす。将軍従ふ。則ち、赤麻呂・忌部首子人を遣して、古京を成らしむ。是に、赤麻呂等、古京に詣りて、道路の橋の板を解ち取りて、楯に作りて京の辺の衢に、堅てて守る。
・癸巳（7月14日）に、将軍吹負、近江の将大野君果安と乃楽山に戦ふ。果安が為に敗られて、軍卒悉に走ぐ。将軍吹負、僅に身を脱るることを得つ。是に、果安、追ひて八口に到りて、仰りて京を視るに、街毎に楯を竪つ。伏兵有らむことを疑ひて、乃ち稍に引きて還る。

7月2日、天武は行動を開始する。軍を二つに分け、紀臣阿閉麻呂を将軍とした大軍は、伊勢の大山から倭京（田川市）に進軍、もう一つの村國連男依等の大軍を近江（小倉南区）の戦場に進軍させた。いよいよ双方が戦場に赴き、戦いが始まる。

大伴連吹負は7月4日に近江朝の将、大野君果安と乃楽山で戦っている。吹負は敗れ身一つで逃れる。逃れた先は「古京」と書かれている。「古京」とは田川市である。当時の京は太宰府であった。倭國の京はすでに古い京であった。天武が伊勢に派遣した東海道将軍、紀臣阿閉麻呂が急いで置始連菟の救援軍を倭に向かわす。敗走していた吹負は置始連菟と合流し再度引き返して、近江朝の将軍壱伎史韓國と戦うのである。今度は、来目という勇敢な兵士の働きで勝利する。

・是日（7月4日）に、将軍吹負、近江の為に敗られて、特一二の騎を率て走ぐ。墨坂に逮りて、遇菟が軍の至るに逢ひぬ。更に還りて金綱井に屯みて、散れる卒を招き聚む。是に近江の軍、大坂道より至ると聞きて、将軍軍を引きて西に如く。到当麻の衢に至りて、壱伎史韓国が軍と、葦池の側に戦ふ。時に勇士来目というふ者有りて、刀を抜きて急に馳せて、直に軍の中に入る。騎士継踵りて進む。近江の軍悉に走ぐ。追ひて斬ること甚多なり。爰に将軍、軍中に令して曰はく、「其れ兵を發す元の意は、殺百姓を殺さむには非ず。是元凶の為なり。故、妄に殺すこと莫れ。」といふ。是に、韓国、軍を離れて独り逃ぐ。将軍遥に見て、来目をして射しむ。然れども中らずして、遂に走りて免るること得たり。将軍、更本営に還る。

この「近江」とは「近江朝廷」をいう。「墨坂」とは小倉南区長野の地名である。倭の将軍に任命された吹負は、近江朝の主力、壱伎史韓国と当麻で戦い、これを破り勝利する。近江朝廷の将「壱伎史韓国」とは壱岐出身の武将であろう。北九州の武将は近江朝廷ではなく地元の天武に味方したのである。

・時に東の師、頻に多に臻る。則ち軍を分りて、各上中下の道に当てて屯む。唯し将軍吹負のみ、親ら中道に当れり。是に近江の将、犬養連五十君、中道より至りて、村屋に留りて、別将廬井造鯨を遣して、二百の精兵を率て、将軍の営を衝く。当時に麾下の軍少くして、距くこと以能はず。爰に大井寺の奴、名は徳麻呂等五人有り。軍に従ふ。即ち徳麻呂等、先鋒として、進みて射る。鯨の軍進むこと能はず。是の日に、三輪君高市麻呂・置始連菟、上道に当りて、箸陵のもとに戦ふ。大きに近江の軍を破りて、勝に乗りて、兼て鯨が軍の後を断つ。鯨が軍悉に解け走げて、多に士卒を殺す。鯨、白馬に乗りて逃ぐ。馬泥田に墮ち、進み

行くこと能はず。則ち将軍吹負、甲斐の勇者に謂りて曰はく、「其の白馬に乗れる者は盧井鯨なり。急に追ひて射よ」というふ。是に甲斐の勇者、馳せて追ふ。鯨に及ぶ比に、鯨急に馬に鞭つ。馬能く抜けて泥を出ず。即ち馳せて脱るることを得たり。将軍、亦更に本処に還りて軍す。此より以後、近江軍遂に至らず。

この「上中下の道」は奈良の道ではない。北九州の道である。「箸陵」も奈良の陵ではない。北九州の陵である。大伴家に伝わったといわれる家紀の壬申の乱の舞台は北九州田川市である。戦記に登場する「飛鳥寺」「当麻」「上中下の道」「箸陵」「乃楽山」は古代の田川市に存在した土地、陵、寺、山であった。

壬申の乱は関西地図で読んではならない

現在、私たちが奈良で見るこれらの地名や陵、寺は八世紀以降の近畿天皇家によって新たに定められたものである。これらの地名と天武紀（上）の地名は同じものではない。天武までの九州天皇家と持統に始まる近畿天皇家は京も国名も異なるのである。

天武紀の壬申の乱は近代の地図で読んではならない。近代地図で読めば大伴吹負の必死の戦いは何ら意味をもたない。奈良明日香での戦いは戦線離脱、「あっち向いてほい」である。吹負が「明日香で勝利しました」と天武に報告したら、天武は「よくやったぞ。お前を将軍に任命する」と讃えたであろうか。反対に「莫迦。何をしてる。今重要なのは不破に結集することだ。奈良明日香で無駄なことをするな。」と叱ったであろう。

近代地図（近畿天皇家の令制國）で読めば大伴家に残された家記が記している倭（やまと）戦記は全くの虚構となってしまう。「倭（やまと）」とは奈良ではない。九州天皇家の「倭（やまと）」、すなわち田川市・香春町である。

壬申の乱は九州天皇家が存在した北九州の九州天皇家の地図で読まれなければならない。